

研究発表

地域と共に進める心の教育を学校づくりの中核に

福井県 福井市岡保小学校

宮越 春美

趣 旨

元来教育とは、ヒトを人とし、人間へと高めていく営みである。その子がヒトとして生を受け、父母のもとで無条件の愛につつまれ、安心し安堵し人として育ち、無関心だった身の回りのものに好奇心を示し始める頃、家庭教育の枠を出て、社会的な存在としての人間に育つべく学校へとやってくるのである。

もちろん、家庭教育が不可能な子どもに対しては父母だけに任せず社会の叡智を集めて助けるべきである。そして、その「心の教育」は、学校が中心になって推進することは言うまでもないが、家庭や地域と共に進めることによって、さらにその効果が著しくなるとされる。心の教育を教育活動の中心に位置づけ、地域にその姿勢を明らかにすることで、地域の力も引き出せるという相乗効果も期待している。校長としてどんな手立てを取って教育の推進に当たってきたかを明らかにし、次への発展へとつなげていきたい。

研究の概要

1 はじめに

豊かな人間性は、学校・家庭・地域社会の中で、子供たちが、日々の生活を豊かに生きることによって培われる。したがって、まずはそれぞれの果たす役割を確認しあうことが大切である。そして、家庭に任せること、学校(地域の幼稚園や小学校、中学校も含む)が中心となってやること、地域の教育力が必要なことや連携することで効果の上がることなど、やるべきことを整理し、研究することにより、ねらいを絞ることができる。

また、心を育てるということは、子供自らが、自己を肯定的に捉え、生きる自信と学ぶ意欲を持つようにすることでもある。そのためにも、学校・家庭・地域社会が連携する中で、子供たちが積極的に地域の人や自然、歴史や文化とかかわるような体験を組み立てることが、子どもたちの

内面に深く根ざした道徳的心情や道徳的判断力・道徳的実践力を育てることになるのではないだろうか。

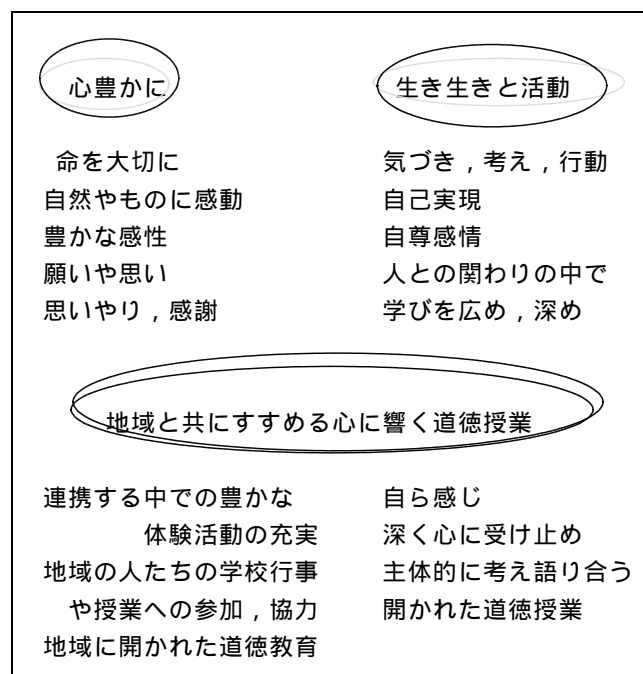
研究の視点は、「変える」・「つなぐ」・「ともに」ということをキーワードにすすめ、計画し、実践し、評価し、改善するというサイクルを大切に研究を心がけていく。

2 研究実践

(1) 変える(変わる)という視点からの取り組み

先生が変わる、教員の凝集力を高める手立て

「どんな人間に育てたいか」ということを具体的に話し合い、共通理解をする。本校では、「心豊かに生き生きと活動する子」をめざす児童像とし、育成の手掛かりを「地域と共にすすめる心に響く道徳授業」と設定した。



道徳授業としたことで、道徳教育の核となる道徳の授業を、子供を変える・親を変える・地域を変えるための起爆剤として研究を進めていくことをが出来る。授業が勝負という教員の意識は、組織体としての教職員の意欲

を喚起し、学校本来の機能を再認識し、共にがんばれるという凝集力を生む。先生の構えが変わる。

親が変わる，保護者参加型授業への実践

保護者の授業参観を「授業参加」へとスタンスを移しながら実践を積み重ねることで、親の意識が変わってくる。本校では、道徳の授業を広く地域に開くことで、共に道徳教育を推進するのだという気概を地域や家庭に醸成したいと考えている。

授業協力者（子供たちは、あったか先生と呼んでいます）の方とは、授業のねらいや参加の方法などを事前に打ち合わせを徹底していく必要がある。授業に参加しようとしてやってくる大人は、それだけで確実に変わる。

参加にどんな方法があるかは、子供の発達段階や価値項目、あったか先生の資質によっても変わってくるので配慮が必要である。校長としては、授業をできるだけ参観することによって、具体的なアドバイスができるようアンテナを高くしておきたい。また、「あったか先生登録バンク」をつくり、担任個々の事務的負担を軽くしておくことも継続するためのポイントだろう。

子供と一緒に考えたり、活動したりする教育参加
本物の体験を伝える教育参加

学習環境を整え、授業を進める教育参加
子供の心の変容について教師と共に評価

子供が変わる，変化を見取る評価への挑戦

指導のあるところに評価がある。指導と評価は表裏一体であると思うが、心に点数はつけられない。だが、評価は必要と堂々巡りをしながらも、いろいろな手だてを講じた。地域の意見をj得ることで、私たちの進めてきた道徳教育が、本当に地域の理解のもとに行われているのか、子どもたちの道徳性を育てているのか、年間指導計画の中で組み入れた体験活動は効果があったのか、道徳教育の全体計画を見直す必要はないのかなど、常に問いかけていくことで、子供の変容を見取りたい。

道徳性の評価への構え

教師と子どもの温かなふれあいを基盤として、共感的理解の構えで評価する。

長期的な視点に立って評価する。

評価に当たって他の教師等の協力を得て、多くの人の目を重ねて評価する姿勢を持つ。

広い視野に立って多様な場面から総合的に理解するように努める。

上記の道徳性の評価への構えを共通理解した上で、いくつかの実践を積み上げている。

- ア 多くの人の目を重ねるための評価（学校と地域を結ぶ「ノート」や「たより」の利用）
- イ 道徳の時間における評価の充実（道徳ノートの利用、道徳の時間評価表の作成実践）
- ウ 長いスパンでの評価の充実（道徳の諸様相評価表

の作成実践）

（２）「つなぐ」という視点からの取り組み

地域からの提案「あったかノート」の取り組み

あったかノートの由来

子どもたちの学校の行き帰りに「行ってらっしゃい」「お帰り」といつも声をかけてくれるおじいちゃんが居ました。そんなおじいちゃんに会うのを楽しみにしていた2年生の子どもたちが、おじいちゃんの姿が見えないとき、「長生きしてね。」などと、その日の気持ちを小石にクレヨンで描き、おじいちゃんの家玄関先に置くようになりました。

そんなある日、突然おじいちゃんは交通事故でなくなりました。遺品の中から子どもたちの届けた小石がいくつも見つかり、子どもたちとおじいちゃんの心の交流が明らかになりました。

その後、感謝の言葉と共におじいちゃんの小石がご家族から届けられ、こんな心の交換をわがふるさとに根づかせたいと、「岡保地区わが町夢プラン・人づくり部会」から提案されたのが「あったかノート」です。

本校は小規模校で、子どもたちに表現力や社会性が育ちにくく、人間関係も固定しがちである。このあったかノートの取り組みは、多様な人間関係を作り出し、いろんな人たちとのつながりを生み出すこととなった。

子どもたちは、友達や家族・地域の人と関わり、心がほっと温かくなったことを「あったかノート」に書き付けていく。……「今日、雨がふる中を歩いていたら、知らないおじさんが『気をつけて帰りね。』と声をかけてくれた。とてもあったかくなったよ。（2年男子）」など内容は様々である。しかし、継続していくうちに、つながりが広がっていくことがわかるようになってきた。現在は、地域と学校(子ども)とのなくてはならない架け橋になっている。

教師は、あったかノートをもとに、子どものよりよく生きようとする思いや豊かな感性にふれ、道徳実践力の伸びを見取るようにしている。また、子どもがどんなことで、あったかい気持ちになったり、どんな人とのつながりを深めているかを知ったり、子どもをより理解し共感することができる。教師と子どものつながりを深める手立てともなっている。

土曜日には、それが地域の方々のお世話のもと有線放送によって広く地域の一軒一軒に届けられている。地域の人のあったか心に気づくその子どもの感性に、大人自身がはっとさせられ、次のあったか心へとつながっていくようすは子どもが大人を変えることもあるのだと思わせるものがある。学校が地域の中で、学校の思いや子どもの思いを発信し広めて、つながりを深めて、地域の輪の中にしっかりその存在を示すのに「あったかノート」の存在は大きな役

割を果たしている。

地域と連携した「あったか便り」の取り組み

「学校を開く」というのに最も簡単でかつ効果的なものの一つに、学校の情報を地域に広めるという手がある。どこの学校でもやっている「学校だより」を地域との相互交流の架け橋として使っている。それも、学校だけの情報ではなく地域の「人づくり部会」の情報も載せ、「あったか便り」として、地域全戸に配布する。

学校長としては、自分の考えや思いを地区全体に示せる数少ないチャンスと捉え、紙面の何割かを発信に使っている。研究部の「地域連携部」と「わが町夢プラン・人づくり部会」が企画発行することにしている。内容としては、学校の役割について、教育の努力・工夫点、家庭教育への提言や今学校で困っていること、家庭や地域へお願いしたいこと、子どもたちの様子、地域のひとづくりに関することなど多岐にわたる。地域と連携することで、学校が地域の学校として果たすべき役割も果たす一方で、地域民の「おらが町のおらが学校」への愛着心も喚起できる効果があったと考えている。

地域の人からの反響も多く寄せられ、それをまた子どもたちの「こころの教育」にも生かしていけるという相互交流は地域と学校をつなぐ役割を果たしている。

79歳の方から寄せられた手紙を読んで、地域と共に教育を進めるといことは、こういう方達の声援を背に受けると言うことなんだと教職員一同、肅然とした思いになったことがある。

「有線放送であつたかノートを聞かせてもらってありがとうございました。とてもよいことだと思います。余韻で今でもあったかです。家の前の畠に居ると、次郎丸の泉さんの坊ちゃんが、何時も挨拶をしてくれます。(中略)私等の若い頃のような醜い人殺しの戦争はもうしないでくださいよ。平和な村、平和な日本を守って下さい。大人になるのを千秋の想いで待っています。(原文のまま)」……こういう人たちに背を押されて、学校は頑張れるんだと思う。

小中連携の取り組み

中学校区内の5小学校と1中学校の校長で集まって共同研究の柱を決め、道徳教育小中連絡協議会を立ち上げ、各学校の研究主任を中心に具体的な共同事業を実施してきた。平成14年、15年度と文部科学省の「児童生徒の心に響く道徳教育研究事業」の指定(地域指定)を受けての試みである。

主題は「みんなで育てる地域の子どもたち～人やものとのふれあいを通して～」と設定。小中連携のふれあい体験活動を実施した。

〔活動状況〕

ア 小中学生クリーンアップ大作戦

自分たちの生活する地域への愛着を持たせ、様々

な人々とのふれあいを通して道徳性を培うことをねらって、小中学生合同で清掃活動を実施する。小中学生合同班長会や自治会長との打ち合わせを重ね、地区の多くの人たちの参加も得た。

イ ふれあいモーニングデーの実施

児童生徒の登校時に、中学生の代表、校区の小中学校の教職員、PTAの補導部や交通指導員らが、街頭に立って挨拶運動と交通マナー遵守の呼びかけを行う。定期的に継続して実施し、地域の中で自然に挨拶したり、マナー違反を注意しあったりできる環境づくりをねらっている。

ウ 小中合同合唱コンクールの実施

各小学校の6年生と中学1年生が一堂に会し、交流を深める。中学生の合唱を鑑賞したり、小学生が全員合唱したりして、豊かな感性を培うのに効果がある。また、小学生が中学校の雰囲気慣れる成果も得ている。

(3)「ともに」という視点からの取り組み

地区とのつきあいに心がけねばならぬことは、「give」と「take」と「together」であると常々我が身に言い聞かせている。

地区に要請ばかりでは、その時は良くても継続はできないし、逆に地区の要請にこたえてばかりでは学校教育の本来の役割に支障を来すこともある。したがって、学校は学校としてなすべきことを明確にし、「あったか先生」の力を借りながら子供たちの教育に当たっていく必要がある。そして、地域の教育力向上のために、学校の施設はもとより豊富な人材を役立てることも必至である。

しかし、一番難しいが大切なことは、「ともに創り上げる」という側面ではないかと思う。

地域の祭りをともに創り上げる。

「岡保ふるさとまつり」は、地区民がこぞって参加する地域最大のイベントである。この行事を積極的に子ども学習の場として位置づけしての取り組みである。日曜日に振り替えしての取り組みとなるので、教職員の勤務との絡みもあって校長としては辛い立場にも立つが、学校の取り組みを広く知らせ、共に学び合い、ともに創り上げるには最高の設定となる。

テーマは、「ほんわか おかぼ 結いの里」、学校のテーマは、「ほんわか おかぼっ子 結いの里」として午前中を基本的には授業参観日(授業参加とできなかったのは並行して体育館では地域の大人の行事が実施されていたため)とした。ただし、設定された時間内では、子ども同士の交流やお年寄りとの交流が組めるように工夫した。

ア 子ども学習の姿が見える学習の設定

総合的な学習の時間や教科の学び、総合単元的道徳学習を地域の人に発信することが中心となる

活動を組む。高学年は、地域の人を巻き込めるような課題を設定する。

当日の学習メニューは、以下の通りであった。

幼稚園・低学年

いろいろビンゴ、お楽しみクイズ、お店屋さん
中学年

越前和紙の話、昔の暮らしにタイムスリップ、クイズあけぼの（福祉教育の一環）、パンづくり、本の神様、昔の道具博物館

高学年

リサイクルショップOKABO、おかぼ探索隊
探求ザ外国

イ 準備や後始末などのボランティアに参加

子どもがお客様状態から脱皮し、環境学習や福祉学習、道徳的実践の場として取り組んでいく。当日は、お年寄りの手を取って校舎を案内する児童の姿や「ぼくたちの学校を汚さないで下さい。」という放送も流され、地域に住む地域員としての自覚を持つことができたように思う。

ウ 地域との共催……教育講演会の実施

「みんな集まれ！一緒に考えようさ」と呼びかけ「子どもを伸ばす地域の力」という演題で山田暁生氏（山田中学生問題研究所代表、日本教育ペンクラブ代表）の話地域民全員で聞き、感想を述べあう機会を設定した。他地区の方々や、中学校の先生も日曜日とあって参加して下さっていた。

ま と め

1 研究にあたっての校長の在り方と指導性

(1) 校長としての学校づくりの方針の明確化

どんな人間に育てたいか、今教育に科せられた課題は何か、学校経営の柱はなど、校長が教育理念を語る。教職員一人一人の教育への思いを凝集させたい。ベクトルの大きさや強さに違いはあっても、方向性は同じでありたい。（研究実践(1)）

各担任は、校長の指針の下、「学級経営案」を作成し、具体的にどんな教育を行いたいのか、児童の実態に沿って自分の思いを重ねる。学期に一回ずつ校長と面談。計画、実践、評価、改善のサイクルに沿って、学級経営に弾力性を持たす。

(2) 心の教育における基本的課題の明確化

心をどう育てるか（研究実践(1)）

道徳の時間をどう充実させるか（研究実践(1)）
研究実践(2)）

家庭や地域とどう連携するか（研究実践(2)）
前項での指導体制づくり、研究体制づくりをいかに

図っていくか（研究実践(2)）、研究実践(3)

(3) 自校の特色を大切にしたい取り組みの設定

自校だけの実践の一つでも持つことが、教職員の凝集力を高め、地域や学校を愛することにつながる。地域も、子どもも同様である。校長としては、毎年“プロジェクトX”をうちたてて、「おらが町の、おらが学校の、おらが」というものを設定できるといいのだが……

2 研究の成果

研究の仮説は、「地域との連携を深め、豊かな体験や人々との関わりを重視し、道徳の時間において、心に響く授業をしていけば、豊かな心や感性が生まれ、自ら考え、生き生きと活動する児童が育つであろう」である。

研究の視点は、心に響く道徳授業の工夫、地域との連携を深めるための工夫である。

上記をふまえて成果をまとめると、仮説は正しいと考えている。研究の視点に沿ったそれぞれの実践も効果的であった。主な成果（教員からの声）を羅列しておく。

学校の役割を認識し、「道徳の時間」に児童の心を育てる柱を設定したことは、良かった。

道徳の評価を指導の裏返しの評価として着手したことは意義があった。（教職員の意欲の喚起）

教師全員研究授業を実施したことは、自分らしい授業の確立、「あったか先生」との連携に対しての自信につながった。（研究体制の充実）

地域との連携がとてもスムーズで、本校独自の取り組みを支援してくれる。地域からの声がよく届くようになり、積極的な地域の協力を得られるようになった。

3 今後の課題

学校教育の要は、道徳教育である。その道徳教育の要は道徳の時間である。しかし、教育界の課題は山積している。油断していると、次から次へと出される施策の前で心が揺れ、「学力向上」「英語活動の実施」「情報教育の推進」と目の前の課題に目を奪われそうになる。そんな中で「学力を支えるのは心なんだ」と迷わず、学校教育の中核に「心の教育」を実質的に据える明確な理念を持ちたい。

今後の課題を列挙する。

道徳における評価の一層の研究は課題である。無理のないよう評価表などの改善を図り、子どもの変容を多角的に見取るような手だてを講じたい。

道徳で培った豊かな心を基盤に、「生きる力」としての基礎学力や表現力などをしっかり身につけさせる工夫を探る必要がある。

「地域と進める」教育の継続を図る。教職員の意識改革をさらに進める。